



内科医師 福井清司

『高脂血症について』

～脂質の役割、種類～

脂質は体の働きを正常に保つために利用される重要な栄養素であり、血液中を運んで各臓器に運ばれて行きます。この血液中の脂肪(コレステロール、中性脂肪等)が必要以上に多すぎる状態を高脂血症といいます。ただし血液中の脂肪レベルが高いか低いかは、血液検査を受けなければ分かりません。

即ち高脂血症は自覚症状に乏しいため見過ごされやすいと言えます。しかしこれを放置したままにすると、血管の壁にコレステロールが溜まって、いわゆる動脈硬化をもたらす、さらには脳梗塞・狭心症・心筋梗塞・大動脈瘤・下肢閉塞性動脈硬化症等といった重大な疾患を引き起こすことになります。コレステロールは細胞の膜の成分として、またホルモンや胆汁酸の原料としてなくてはならない物質です。中性脂肪は主に皮下や内臓の脂肪細胞の中に蓄えられ寒さや衝撃から身を守る皮下脂肪となり、必要に応じて分解され身体活動のエネルギーとして使われます。

コレステロールや中性脂肪は「あぶら(脂質)」でありそのままでは水に溶けないので、血液中ではそのまわりを蛋白質が取り囲み水に溶けやすい粒子(リポ蛋白)の状態が存在しています。リポ蛋白にはいくつかの種類がありその一つであるLDLコレステロールは肝臓で作られたコレステロールを体のすみずみ(末梢組織)まで運ぶ役割を担いますが、その供給が過剰になると(血中濃度が上昇すると)血管壁に付着・蓄積し動脈硬化の発症・進展をもたらすため「悪玉コレステロール」と呼ばれています。一方HDLコレステロールは末梢組織並びに血管に蓄積した余分なコレステロールを回収して肝臓に戻して処理させる働きを担うので「善玉コレステロール」と呼ばれており、血中の濃度が高いと動脈硬化の進行が抑制されます。

我々が通常測定しているコレステロール値とは、HDL及びLDLコレステロールや他のリポ蛋白に含まれるコレステロールをひとまとめにした「総コレステロール」の値を指します。中性脂肪(食後はその濃度が上昇するので検査は空腹時が望ましい)は動脈硬化促進作用は弱いものの基準値を超えた場合はLDLコレステロールの上昇やHDLコレステロールの低下を招くことで動脈硬化を促進すると言われています。

高脂血症の診断基準を示します。

高脂血症の診断基準(血清脂質値 空腹時採血)	
中性脂肪(トリグリセリド)	150mg/dL以上
総コレステロール	220mg/dL以上
HDLコレステロール	40mg/dL未満

検診や人間ドックをうけられた方結果は如何でしたか？
一度も測定されたことのない方、是非検査を受けましょう。